

氏名	横須賀 柳子 (ヨコスカ リュウコ)
本籍	山梨県
学位の種類	博士 (学術)
学位の番号	博士 第87号
学位授与の日付	2019年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	外国人留学生のインターンシップを通じた学びに関する研究

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	宮副ウォン 裕子
	(副査) 桜美林大学教授	池田 智子
	桜美林大学准教授	増田 恭子
	北星学園大学教授	柳町 智治

論文審査報告書

論文目次

序章 研究の背景.....	1
0.1 問題の所在と研究目的.....	1
0.2 インターンシップをめぐる社会的背景.....	2
第1章 先行研究および研究概要.....	7
1. 学びに関する研究.....	7
1.1 理論的枠組み.....	9

1.1.1 文化歴史理論.....	9
1.1.2 状況的学習論.....	10
1.1.3 「活動理論」	12
1.1.4 学びの深まりと広がり	15
1.1.5 共変移論.....	17
1.1.6 アイデンティティ	18
1.1.7 自己概念の確立.....	19
1.1.8 アイデンティティ形成のプロセス.....	22
1.2 職業領域での学び	24
1.2.1 予期的社会化.....	24
1.2.2 インターンシップに関する研究.....	25
1.2.3 参加前後の評価.....	25
1.2.4 インターンシップの種類と効果.....	29
1.2.5 外国人留学生のインターンシップ.....	30
1.2.6 先行研究の問題点	31
1.2.7 理論のまとめと本研究の視座.....	32
1.3 本研究の概要.....	36
1.3.1 研究課題.....	36
1.3.2 調査協力者	36
1.3.3 研究方法.....	38
1.3.4 収集データ	39
1.3.5 分析的枠組み.....	41
1.3.6 分析方法.....	43
1.3.7 倫理的配慮	44
1.3.8 本論文の構成.....	44
第2章 外国人留学生のインターンシップ参加の意味.....	46
2.1 本章の概要	46
2.2 参加前の「現在の自分」と「過去の自分」とのつながり	47
2.2.1 社会文化的制約と押し出された自分.....	47

2.2.2 社会文化的促進と引き上げられた自分	49
2.3 「現在の自分」の不確実性の低減	51
2.4 「なりたい自分」の希求	52
2.5 参加後の「現在の自分」	54
2.6 参加後の学びのふり返り	57
2.7 考察	60
第3章 概念的道具を媒介した学び – 社会科学系実習生の事例 –	63
3.1 本章の概要	63
3.1.1 「道具」の分類	63
3.1.2 実習生の用いる道具	65
3.2 ティとエンの実習概要	65
3.2.1 業界特有用語の専有	67
3.2.2 道具の連鎖と意味変化	69
3.2.3 アイデンティティ変容	70
3.2.4 「なりたい自分」への接近	72
3.3 キョウの実習概要	73
3.3.1 既習語の再解釈	73
3.3.2 「なりたい自分」への方向性確認	75
3.4 考察	75
第4章 物理的道具を媒介した学び – 理工学系実習生の事例 –	79
4.1 本章の概要	79
4.1.1 事例となるインターンシップの概要	79
4.2 ヨウの実習概要	79
4.2.1 道具を介した認知的徒弟制	80
4.2.2 実験道具と身体間の相互作用	83
4.2.3 暗黙知の専有	84
4.2.4 他者の介在	86
4.2.5 共同体内の分業	88
4.2.6 「なりたい自分」像の強化	89

4.3 タンの実習概要.....	90
4.3.1 「文化的透明性」の獲得.....	91
4.3.2 共同体内での「現在の自分」の布置.....	92
4.3.3 「なりたくない自分」の発見.....	93
4.4 考察.....	95
第5章 水平的関係にある他者とのアイデンティティ交渉.....	99
5.1 本章の概要.....	99
5.1.1 水平的関係にある他者との協働.....	99
5.1.2 集団形成に関わるアイデンティティ.....	100
5.1.3 事例となる実習生の概要.....	102
5.2 キムの実習概要.....	103
5.2.1 社会的アイデンティティによるカテゴリー化.....	103
5.2.2 個人的アイデンティティによる脱カテゴリー.....	105
5.2.3 「外国人」アイデンティティの顕現化.....	107
5.2.4 協調的集団への再カテゴリー化.....	109
5.2.5 「重要な他者」による評価.....	110
5.3 シンの実習概要.....	112
5.3.1 外集団への自己カテゴリー化.....	113
5.3.2 社会的アイデンティティによるカテゴリーの維持.....	116
5.3.3 多面的アイデンティティによる役割演出.....	119
5.3.4 実習担当者による評価.....	120
5.3.5 チーム共同体の同異.....	121
5.4 考察.....	123
第6章 垂直的関係にある他者とのアイデンティティ交渉.....	129
6.1 本章の概要.....	129
6.1.1 アイデンティティ探求プロセス.....	129
6.2 オウの実習概要.....	131
6.2.1 熟達者とのアイデンティティ交渉.....	132
6.2.2 ロール・モデルとの接触による自己評価.....	133

6.2.3 熟達者視点からの他者評価.....	134
6.2.4 熟達者の観察による反映的自己.....	135
6.2.5 顧客視点による他者評価.....	138
6.2.6 熟達化の指標.....	139
6.2.7 経営者とのアイデンティティ交渉.....	141
6.3 「なりたい自分」のさらなる希求.....	144
6.4 考察.....	145
第7章 総合考察.....	150
7.1 インターンシップ参加の意味.....	150
7.2 インターンシップでの実践による学び.....	151
7.3 媒介物にみる学び.....	157
7.3.1 道具へのアクセス.....	158
7.3.2 視点・視野の拡大.....	159
7.3.3 道具の連鎖と立体化.....	160
7.3.4 身体的道具の感覚と情動.....	161
7.3.5 概念的道具のことば.....	163
7.4 他者とのかかわりによるアイデンティティ形成.....	165
7.4.1 予備的社会人の「多重成員性」.....	166
7.4.2 自他間のアイデンティティ交渉.....	167
7.4.3 個人内の矛盾・個人間の対立.....	168
7.4.4 個人内の同調・個人間の協調.....	172
7.5 インターンシップでの学びのまとめ.....	175
7.5.1 留学生への提言.....	175
7.5.2 大学への提言.....	178
7.5.3 企業への提言.....	182
7.5.4 提言のまとめ.....	183
終章 本研究の意義・限界・今後の課題.....	185
参考文献.....	- 1 -
初出一覧.....	- 14 -

図表リスト	- 15 -
付録	I
資料1 調査協力承諾書 (留学生)	I
資料2 調査協力承諾書 (企業)	II
資料3 事前質問紙調査	III
謝辞	—

論 文 要 旨

本論文は、日本の企業でのインターンシップに参加した外国人留学生による学びに関する実証的研究である。日本におけるインターンシップは、近年その機能的定義付けが不安定なまま、量的拡大の一途をたどっている。しかしながら、これまでの研究の多くは大学機関、公的機関、民間企業などによる質問紙調査を用いた成果報告となっており、ビジネス実践を通じた学びを精緻に検証したものとはいえない。そのような現状を踏まえ、本研究では、大学領域と企業領域の間を往還するインターンシップ参加留学生の学びを質的に探求し、その考察から今後の大学教育への展望を開こうとしている。

本論文は全 9 章から構成されている。まず、序章では、本研究テーマに着眼した経緯として、日本特有の教育環境下にあるインターンシップの社会的背景と、大学、企業、政府など異なる立場の人々による複数の価値の混在という問題が説明されている。第 1 章では、本研究の理論的背景となる学びに関する先行研究を概観し、また、日本のインターンシップに関する研究を整理した上で、研究課題を特定し、研究の概要を述べている。研究課題は、1. 外国人留学生はインターンシップに参加して何を学ぼうとしたのか、2. 実習生はインターンシップの実践過程でどのように学んだのか、1) ビジネス領域の中でどのように道具を使い、その操作を通してどのような内的表象を手に入れるのか、2) どのような他者との相互交渉を通して、アイデンティティを形成、再形成するのか、3. 実習生はインターンシップで何を学んだのかである。研究協力者は、東京都内の同一私立大学に在籍する学部外国人留学生 11 名で、分析には彼らから収集した複数のパーソナル・ドキュメントが多元的に使用されている。

第 2 章では、実習期間全体の学びのプロセスを大枠として踏まえて、研究課題 1 および 3 について社会文化的なマクロな要因と個人のミクロな思考との相互作用を時空間の移動という切り口から検証し、外国人留学生にとってのインターンシップへの参加の意味を明らかにしている。第 3 章から第 6 章までは、実習期間内の学びの事例を取り上げてさらに詳細に分析し、研究課題 2 および 3 の解明を試みている。

このうち、第 3 章と第 4 章では、個人と対象世界とを媒介する「道具」に焦点を当てている。第 3 章では、社会科学専攻の実習生の個人と実践を媒介する概念的道具としてのことばを中心に、第 4 章では、技術に関わる理工学系専攻の実習生が用いる物理的道具を中

心に検討している。第 5 章および第 6 章では、個人と実践を媒介する「他者」に焦点を当て、社会科学系専攻の実習生の学びを検証している。第 5 章では、企画プロジェクトのチーム実践共同体を構築していく過程での他者との相互行為を通じた学びの軌跡を追い、第 6 章では、社会科学系専攻の実習生が、既存の企業組織に参入し垂直的な関係にある社員や経営者および顧客とアイデンティティ交渉をする過程について考察を展開している。

第 7 章では、総合的な考察および外国人留学生、大学、企業に向けての提言がなされている。社会文化歴史的な時空間の交差にあるインターンシップでの学びとは、真正な企業状況に埋め込まれた多様な道具や他者との相互行為を通して、共同体の特性を反映した知識や技術をわがものとし、「なりたい自分」になっていく全人格的な変容の過程であることが示されている。職業領域に入ることでそれまで無自覚に身に付けていた他律的な学習態度がほぐされ、実践の中の複雑な境界を生成、解消しながら、状況や他者に応じて行動できる自律性などの資質が高まっていく様相が明らかにされている。

最後に終章では、本研究の意義と限界、今後の課題が述べられている。

論文審査要旨

本研究の著者は、国内企業のインターンシップに参加した学部留学生の学びとその過程を半構造化インタビューや質問紙調査、実習報告書の記述をもとに、複数の研究理論を多角的に組み合わせた手法である「トライアングレーション」(Denzin 1978)を応用し分析・考察した結果を、ホリスティックな視点から精緻に描き出している。従来、定量的研究で分析されがちであったインターンシップにかかわる研究を、新たな視点である社会文化的アプローチから分析し、日本企業での留学生の「学び」の解明に意欲的に取り組んだ研究と言える。その意味から、本研究のようにインターンシップ参加者の学びを彼らがおかれた社会文化的文脈の諸要素との関係性を通して克明かつ精緻に追跡した研究がもたらす学術的意義は大きい。多言語化・多文化化が急速に進行し、ビジネス環境における大きな変動を経験している企業関係者、そして日本語教育を含む教育に携わる者にとっても、学生の大学内外における学びと、社会をどのように連結していくべきか、そのうえで参考となる点は少なくない。本論文は、その学術的分析・考察の完成度はもとより、大学教育および実社会に及ぼすインパクトの大きさという点においても高く評価される。同時に、本研究の著者が今後も自立して研究活動を行うに足る資質を備えた研究者であることを十分に証明していると言える。

口頭審査要旨

公開試問の最初の 30 分間は、執筆者本人がパワーポイントを用いて口頭発表を行った。研究の背景、研究課題、研究概要(対象者、データなど)、理論的枠組み、分析方法、考察

結果，結論，本研究の限界，今後の課題など，わかりやすい視覚資料を提示しながら，論文について詳細な説明を行った。

試問後半の30分は質疑応答であった。審査委員会の副査3名より，上述の論文審査要旨に沿って指摘や質問があったが，本人は質問に対して落ち着いた態度で答え，自身の研究領域に関する学術知識を十分に有していることが認められた。副査より，今後の研究のさらなる発展に向けて「分析結果記述の多重性・複層性を示すことの重要性」「留学生のインターンシップの＜教育的機能＞の維持と向上に繋がる具体的な活動の提案と実践の緊急性」などが提案された。

審査の結果，本論文は博士論文としての水準を超えた優れた研究であること，執筆者本人が博士号の学位を授与するに十分な学術的知識，および，今後自立して研究を継続発展できる能力を有することが確認され，審査委員会委員4名が全員一致で合格と判定した。公開試問当日は，桜美林大学院（修士課程および博士課程）の在校院生，修了生，学外からの出席者など合計12名が出席した。